

毎日歌壇

米川千嘉子 選

柿を干し落花生干し薯を干し猿駆除されしを
誰も語らず 京丹後市 山副美佐子

△評▽猿が駆除されて戻った平穏だが…
…熊による被害が続く今年、野生動物の
被害を防ぎ生ずる方法が探られている。

トランポリンピロンバルンと跳びはねる子ら
の影法師が長くなる 久留米市 春日 登

△評▽滞空時間の長いトランポリンで楽し
む様子。オノマトペも楽しく秋に似合う。

非正規が薄まってゆく ことだけの愚痴を課
長が注いでくれて 四日市市 早川 和博

外ヨガは古墳公園空仰ぐシャバーサナとは
屍のポーズ 奈良 島 眞澄

向かい合い老母の爪を切っているこれが母の
指これが母の手 沼津市 本田 影二

片足がいつも捻れているような気がするタイ
ツを履いている日は 東京 遠野 鈴

恥ずかしいシールを盗難避けとして貼った帰
りの傘恥ずかしい 長岡市 三月 とあ

若きらは目を合わさない老いならばみな待つて
いる天気のことば 河内長野市 寺田 愛子

秋風に遮光ネットの浮き沈む薔薇の苗圃は
息するごとし 東京 浅倉 修

娘の安産願いて茶断ちをする我に友から届く
生薑湯の素 村上市 杉江 正子

加藤 治郎 選

起きれない 職務の覆う重圧は錨となりて
朝は海底 狭山市 りんか

△評▽初句の叫びが痛切。沈黙の後にイメ
ージを描くのだ。職務の重圧が「錨」とい
う暗喩で表された。海底も実感があがる。

こんなにもふたりで月を見るのにわたしに
はこの夜しか無いのに 西宮市 荒川 裕香

△評▽私は別離を思っている。月と一緒に
見ているのにあなたは気づいてくれない。

ふうわりと風に吹かれて散るもみじ 「木枯
しに抱かれて」聴く私 東京 畑 えな

七五三ここにあなたがいたならば孫を抱き上
げくりと回る 日野市 があこ

もう君は僕のためには怒らない 雨の渋谷を
歩く人たち 名古屋 森本 有

詩のセンス 詩のセンス、って言いながら、死のセ
ンス、って思っています 東京 境 千尋

ベースは長袖をギターは半袖をドラムはタン
クトップを着てる 長岡市 三月 とあ

金木犀寂しく香るたいせつな人を忘れてきた
ばかりの世 平塚市 芝澤 樹

過去がこの手に触れて 時間の流れる方向は
実は定まってない 四万十市 佐竹 紫円

つけないで待っている部屋ながれこむ天の川
って漆黒だった 東京 石井 しい

水原 紫苑 選

母さんにとっては花瓶だったこの空の牛乳瓶
の透明度 福岡市 水川 海

△評▽牛乳瓶という日常の小さな器が、「母
さん」には花と同じくらい美しく見えてい
たのかも知れない。

少年が本を貸し合う内臓の光を溶かすように
騒いで 岡山市 松井 度

△評▽何の本を貸し合うのだろう。少年は
本当にこんなふうに騒ぐ。

退屈な日々もこの世と思うとき檸檬のすべて
を奪い去りたい 大阪 中村 杏

鍵盤から弾け飛ぶ光の粒子がショパンの輪郭
を帯びてゆく 甲府市 村田 一広

棧橋が口を閉ざした 雪が降りあなたが消え
たところからだった 東京 境 千尋

空を割るビルの灯りを吹き消して、硝子を飲
んだ者たちのため 吹田市 舟橋 いま

紺碧を穿って真っ赤な方舟がきみやあなたや
かれらを乗せる 東京 留 留

だれもみな死ぬいのちだと気がついて透きとお
るほど響くくちぶえ 宮古島市 塩見 伴

雨音の消える朝はあ雪が音をたてずに山
ほど積もる 札幌市 橋 晃弘

冬夕焼会釈を交わす畦道や地平線には陽はま
た沈む 奈良市 浦城 亮祐

伊藤 一彦 選

マカロンのパステルカラーみたいな子 ビビッ
ドな私じゃだめですか 宮崎 門田 藍子

△評▽上の句の比喩が面白い。今は明るく
て優しく可愛らしい子が求められるのか。15歳と
いう作者の「ビビッド」のアピールがいい。

ガスコンロにこびりついた油汚れ銀河のよう
にぎとぎと光る 相模原市 榎本 ハナ

△評▽ガスコンロの汚れに着目したのが出
色。下の句の「ぎとぎと」もさすがだ。

気まぐれに憎んだりすることもあり歯ぎしり
の音させ落ち葉踏む 山形市 新道百合子

せっかちなアイツの乗った霊柩車赤信号に
かららず進む 金沢市 竹内 一二

看板にクマさんの四字あるパン屋しばし頑張
れ改名せずに いわき市 吉田 健一

失恋を繰り返しつつ学びおり好きな人はい
る好きな人 札幌市 住吉和歌子

桃栗が実っておれど焦らずに稽古に励む我は
柿の木 神戸市 北村 行生

「七人の侍」に出る賊のごと猪が窺う藩の
畑を 西海市 まえだいっき

すみません接客業で身につけたごめんなさい
を忘れていった 福岡市 山下 朝音

あこがれを失くしたままで回る日々 コン
口の炎の見えない正午 東京 奥山いずみ

投稿規定

はがき1枚に選者を指定し、未発表の自作を2首・2句まで。住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記し、宛先は〒100-8051(住所不要)毎日新聞学芸部、短歌は「毎日歌壇」、俳句は「毎日俳壇」、○○先生(希望選者名)係へ。毎日新聞デジタルの投稿フォーム

(<https://mainichi.jp/kadan-haidan/>)でも受け付けています。

他媒体との二重投稿や同一作品を複数の選者に投稿するのは厳禁。投稿は趣旨を変えずに添削することがあります。入選作は毎日新聞社の電子メディアやデータベース、アプリ「俳句てふてふ」で公開します。



こちらから
投稿できます